

『ACTUS』記事から考える教育

いしかわ教育総合研究所共同代表 半沢英一

北國新聞社が発行する月刊誌『ACTUS』2020年2月号に「判明！金沢市統一テスト 中学校別平均点 トップは紫錦台302点 最下位と86点差」なる記事が載った。金沢市統一テストとは進路指導に役立てるため市統一テスト委員会によって行われる国語・社会・英語・数学・理科5科目の全市共通テストで、中学校3年生を対象に例年11月と1月に実施される。生徒には自分の成績、受験者全体の平均点、自校の得点分布のみが伝えられ学校別平均点は公表されない。

『ACTUS』は昨年11月に実施された各校での成績分布図を入手したとし、市内21中学校の平均点と順位を実名で表にしている。また定期テストや宿題を廃止する改革で話題になった西南部中学を「統一テスト、平均点を31点下回る」と別枠の記事で取り上げ、さらに金沢市教育長に市の学力格差についてインタビューを行っている。学校別平均点の公表は学校の序列化につながるのをつつしむべきという現場校長や市教育長の声が随所で紹介されているが、『ACTUS』は「序列化を避けようとするのは、現実から目を背けようとしているようにも映る。教育委員会や学校だけでなく、生徒や保護者も含めて現状を把握することが、学力向上の第一歩と思えてならない」（p14）と自己を正当化している。

しかし『ACTUS』記事は地域を代表するオピニオン雑誌の論説として、残念ながらあまりに粗暴であると言わざるをえない。

第一に、同記事には「子どもの貧困」（厚労省によると子どもの7人に1人が貧困）やそれがもたらす教育格差という現代緊急の問題への視点が絶無である。塾に行きたくても経済事情で行けないどころか、静謐な学習ができる家庭環境さえないといった子どもが多数いる。学校間の成績格差には地域間の経済格差がある程度反映しているはずだが、『ACTUS』にはそういう視点が微塵も見られない。また誰も悪い成績を取りたくて取っているわけではない。『ACTUS』の記事を見てつらい思いをした保護者や子どもも多いはずだが、そういった記事のむごさに対する自省も全く見られない。

第二に、同記事には日本におけるテスト得点至上の競争過熱化に対する問題意識が見られない。2017年には石川・秋田と並ぶ全国学力テスト（全国学力・学習状況調査）成績上位県・福井で、成績指導加熱による中学生自殺という痛ましい事件が起こり、福井県議会では全国学力テストへの過剰対応に反省を求める意見書が採択された。西南部中学の試みも、手法の巧拙はともかく、過度の競争的環境を緩和しようという理念は正しいはずだ。また日本をはじめ世界のほとんどの国・地域が採択している国連「子どもの条約」前文は、子

どもは平和・尊厳・寛容・自由・平等・連帯の精神で育てられなければならないとしている。テストの成績だけが教育の目的ではない。そして国連「子どもの権利条約」委員会は日本の教育の「過度に競争的なシステム」に対し警告を発し続けている。「学校別平均点の公表は学校の序列化につながるのでもつしむべき」という声にはそれなりの正当性があるはずだ。『ACTUS』記事はこのような内外の問題意識に全く無頓着である。

第三に、同記事には日本国憲法26条、世界人権宣言26条に掲げられた教育権（教育は万人のためにある）を無視する姿勢が見える。金沢市教育長へのインタビューで、記者氏の「残念ながら、勉強が得意な子、苦手な子に分かれるのは仕方のないことです。だから、学力のある子、学習意欲が高い子の能力をさらに伸ばしてあげる方が有意義だと思うのですが」という問いに、教育長は「だけど僕たちは、下位層の子を放置することはできません。少しでもその子たちの学力を伸ばすことをあきらめてはいけない」と（正当に）答えている（p19）。学校の成績が優秀でも感心できない生き方をする人もいるし、逆に学業が不振でも立派な社会生活を送る人もいる。記者氏の「有意義」判断は短絡的だが、それ以前に学業不振者の切り捨てを平気で示唆する人権感覚の欠如が問題である。

第四に、同記事にはテスト成績偏重の学力への疑問が見られない。教科の内容がよく分からなくても、形式さえ覚えればそれなりの点数が取れる経験は誰でも持っている。早急なテストでの点取り技術が、日本の学生の数学力にもたらす深刻な負の影響さえ指摘されている（『「%」が分からない大学生』）。教科の内容に対する深い理解、それがもたらす感動がなければ、大学生や社会人になってさらに勉強しようという意欲が起こるはずがない。そんな学力で良いのかといった疑問は『ACTUS』記事には全く見られない。

第五に、同記事における教育観以前の間観はあまりにも狭い。同記事は「中学生のころ、どんなテストでも校内順位が出るのは当たり前だった。毎回示される順位は、やる気の源泉だった」という記者氏の述懐で始まる（p9）。そういう人を否定する気はないが、そういう人ばかりではないことも事実である。成績が悪くて順位表など見たくもないという人もいるだろうし、成績上位は当たり前で学校の成績など興味もないという人もいる。また「人を援けられる人間になりたい」とか「社会的に有用な人間になりたい」と思うことが「やる気の源泉」だった人もいる。教育観の前提には人間観があるはずだが『ACTUS』記事からうかがえる人間観はちょっと寂しいのではないか。

『ACTUS』には、地域を代表するオピニオン雑誌としての責任を自覚し、広い視野と深い見識に基づく論説を求めたい。また教育に関心を持つ子どもや保護者他すべての関係者には、この『ACTUS』記事を教育について考える契機とされることを希望したい。